魔法少女は背徳の檻で

淫らなフェアリーテイル

小説 冬野ひつじ　挿絵 草上明

立ち読み版

プロローグ　星のない街　006
第一章　少女達の秘めごと　016
第二章　真夏の夜の淫夢　あるいは許されぬ願望　061
第三章　姉弟は淫らの森を彷徨する　140
第四章　穢されし輪廻　228
エピローグ　魔法少女のいる街　262

登場人物紹介

Characters

藍澤 美月（あいざわ みつき）

神乃木市に転校してきた少女。魔法少女ラティオ・ノクスとして、紗雪と共に異形と戦うことになる。

神乃木 紗雪（かんのぎ さゆき）

神乃木市の核を担う、神乃木家の娘。魔法少女ラティオ・ルクスとして、市内に出現する異形と戦っていた。

藍澤 拓斗（あいざわ たくと）

美月の弟。現在は不登校で、家にいることが多い。

神乃木 豪蔵（かんのぎ ごうぞう）

紗雪の父。神乃木市の中心人物として君臨している。

（いけない……こんな事を思い出している暇があるなら、早くこの触手の分析を……）
取り逃がした怪物の触手を、紗雪はサンプルとして保管していた。身を起こして、その触手の浮かぶ標本瓶を手に取ろうとした瞬間、
ゴトリ、とひとりでに標本瓶が倒れた。ホルマリンがじわじわとテーブルに広がる。
「……まだ、生きてる⁉」
思わず仰け反った紗雪の目の前で、千切れた触手はウネウネと蠕動（ぜんどう）し始めた。
「そんな……っ、なんて生命力なの！」
標本瓶から這いずり出た触手は、分泌を再開した粘液でマホガニー材の上へ鈍く光る銀色の筋をつけながら……少女の胸元の正面でピタリと止まった。
（え？　威嚇……⁉）
そして、鎌首を擡（もた）げる蛇の如く狙いを定めたかと思うと……跳んだ。
「きゃぁッ⁉」
悲鳴は口内に押し入ってきた肉塊の粘つく断面に押し戻され、
「んぐッ⁉　んんッ、ふぐぅッ……⁉」
触手の先端を両手で掴もうとしても、虚しく滑るだけだ。舌に吸い付き口内で激しく暴れるおぞましい生命体に、金髪の魔法少女は久しく忘れていた無力感と恐怖にただただ翻弄されるばかり。
（どうしてッ⁉　このままわたくしは死んでしまうの……⁉）

少女の魔力を吸収してか、ひんやりとしていた触手はいつしか焼け付くような熱さで口腔内を占領していた。ドクンドクンと脈打つのが頬の裏側ではっきりと感じられる。

やがて、少しずつ少女の身体から力が抜け始めた。

「んむ……ッ、ふぐ……ッ、ふぅ……ン……」

（ダメ……このままだと本当にわたくしの魔力が、吸われて……）

変身していないとはいえ紗雪の魔力は極上の栄養になったようだった。瞳の光が弱々しくなっていくのとは対照的に、口を犯す触手はより力強さを増していく。

（あれ……わたくしの身体……何か、ヘンな感じに……）

最初に襲ってきた恐怖の波が緩やかになるにつれて、段々と別の感覚が込み上げてくる。

（身体に……ち、力が……入らない……ですわ……ふわふわして……怖いのに、気持ち良くて……ゾクゾクしますわ……）

少女の表情は、恍惚としたものに次第に変わっていく。

「ふぁ……ンッ、あぁ……こんなの……美月さんに知られたら……」

数時間後、ドレス姿の紗雪は金髪を振り乱してベッドに仰向けに横たわっていた。

片膝を立ててはいるが、落ち着きがなく、シーツの上でもじもじと太腿同士を擦り合わせている。しどけなくはあるが、淑女の色香すら漂わせているそのスカートの下では、あの触手の切れ端が蛇のように蠢いていた。

「あぁン……」
堪えていた甘い喘ぎが濡れた唇から糸を引くように漏れ出る。視線を宙に彷徨わせたまま、紗雪は右手でドレスの上から乳房を揉みしだいた。慌ただしくパンティの中へと滑り込ませた触手は、食堂にいる間から既にしとどに濡れそぼっていた姫割れを容易くこじ開けると、先端を細く変形させて膣口に潜り込んでくる。そのまま処女膜に開いた隙間を擦り抜け、紅く充血した粘膜を抉りながら子宮の入口まで侵入してきた。
（これ以上奥に入ってきたら……ンあッ、わたくしの純潔が、穢されてしまう……ッ）
理性を揺さぶる気持ち良さの波が、脈動の度に大きく高まり、
（はぁッ……でも、もう少しだけ……ッ……そうしたら、もう二度とこんなはしたない真似は……しないようにしますわ……）
喘ぎながら少女は自分に言い訳をする。トロトロの蜜の中で、触手は居心地良さげにその身体を震わせ、細長い先端を伸ばしては子宮口をコツンコツンとノックしていた。
「あッ⁉　ひゃうン……ッ⁉」
膣の収縮に合わせて膣の内側から内臓を押され、甘い圧迫感に金髪少女は下がった目尻をピンク色に染めていく。
（美月さん、今頃はきっとお勉強をしてるわよね……それなのに、わたくしがこんな……ンはぁッ、恥ずかしい事をしていると知ったら……ッ、軽蔑……ッ、されてしまいます）
触手がミチミチと膨らみ始める。処女膜はあくまで傷付けず、その奥では膣肉との隙間

がなくなるほどにまで密着されて、肉襞がその硬さに快感を予感して甘痙攣を起こす。
「ひゃぅッ、もう、いけませんわ……ッ」
その声も、まるでおねだりのように鼻にかかっている。
王女然とした気品のある顔付きは、今や肉悦に溺れて締まりのない牝のそれに変わっていた。
「もう、これ以上は……ひゃあン⁉」
触手の動きがふいに変化した。
「ンあッ⁉　ひゃぐぅッ⁉」
とぐろを巻くような体勢から一気に体長を伸ばし、膣壁をブラッシングでもするかのようにズルル……ッ、ズルル……ッ、と下り始めた。
「あああッ⁉　出ちゃダメッ⁉」
排泄感と似てはいるが、その数倍も大きい刺激に背筋がゾクゾクッと震えてしまう。
言葉とは裏腹な本心がつい出てしまった途端、今度は、
ぬじゅる……ッ！
再び子宮目がけて触手が侵入を開始する。
「ふぁッ⁉　そんなに動いちゃ……ッ、はぁあン⁉」
まるで少女の中の感触を楽しんでいるような動きで、触手は淫らな上下運動を繰り返す。
（あぁッ、お腹の中ッ、メチャクチャにされていますわ……ッ！）

やがて触手はゆっくりと動き始めた。襞を擦るようにずるずると引き抜かれる。排泄感にも似た快感が、ぞくぞくと背筋を駆け上がる。それからまた挿入が始まって、息をするのも苦しくなるほどに、腹部を圧迫する。触手はまるで膣襞の擦れる感触を楽しんでいるように、決して性急にならず、飽きる事なく何度も上下した。

紗雪はくぐもった喘ぎ声を漏らし、途切れる事のない執拗な触手の愛撫に恍惚とする。

「はぁ……ンッ、あぁ……なんていけない触手なの……」

刻々と時間が過ぎていくが、触手の動きは全く衰えない。魔の物にしか持てない貪婪(どんらん)さと持久力で少女の膣肉を抉り、擦り続けている。

「いけないコね……はぁッ、わたくしにこんな……悪戯をするなんて……」

詰(なじ)るはずの声も、甘く蕩けている。

触手と少女は睦み合い、喘ぎ声と水音は一つに溶け合って淫らな旋律を奏でている。

まるで恋人との愛の交歓のように、少女は自然に昂りを訴えてさえいた。

「いいですわ……んッ、はぁ……そう、もっと満たして下さいな……」

相手が魔の物どころかその身体の一部でしかなく、増大した魔力を以てすればその場で消滅させる事など容易いはずではあったが、紗雪の頭にはそんな考えなど全く浮かばない。ただひたすらに感じさせられ、頭の芯まで蕩けていた。シーツはもう花瓶の水でもぶちまけたかのようにぐっしょりと濡れ、甘酸っぱい蜜臭が少女を包んでいる。

カーテンの隙間から弱々しい朝日が差し込む頃、紗雪はようやく胎内から触手を抜き取

り、そして気を失うようにしてそのまま眠りに落ちたのだった。

「ええと、今日はハンバーグとお味噌汁と、あとサラダでしょ……」

制服の上からあたふたとエプロンを着け、美月は買ってきたばかりの食材をレジ袋から取り出して並べる。スーパーからずっと走ってきたので、まだ息が上がったままだ。

「あ……っ」

焦っているせいでミニトマトのパックを落としてしまった。中から転げ出た赤い小さなボールが床の四方に転がる。慌てて拾おうと床に屈み込んだ途端、

「ひゃ……？」

少女の顔は、たちまち耳まで紅く染まる。

（やだ……アソコが擦れて……）

一階には誰もいないのが分かっているのに、ついキョロキョロと辺りを見回してしまう。

（どうしちゃったんだろう、最近こんなのばっかり）

フェイが出現しなかったのは結局五日間だけだった。翌日からは数を増して現れ、そのせいで美月は休む間もない。

（今日なんか朝から四回も出てきたし、それに、そのせいで身体が……）

戦闘が激しくなった事よりも遥かに大きな悩み。それは、変身を重ねるごとに強くなっていく身体の疼きだった。ちょっとした刺激でも少女の乳首や肉豆では快感の小さな火花

が爆ぜ、あられもない声が漏れてしまう。
（さっきもコスチュームがおっぱいに擦れて攻撃ミスっちゃったし……紗雪さんに助けられたけど……ばれなかったかな……？）
反省しているそばから下着の奥を熱くしてしまっている。
「ん……っ、はぁ……ッ、あと一つ……」
カウンターの下に手を伸ばして微妙に膝の角度を変える度に、ヌチャヌチャッ、と、甘蜜が零れ、下着と肉花弁の間で糸を引く。
「……あ、あった……ぁ……」
やっとの思いで摘み上げたミニトマトの最後の一つ。その円やかさと水気たっぷりの張り詰めた感触に、突然、思ってもみなかった考えが湧き上がってくる。
（これ……もしも、アソコに入れたら……気持ちイイ……のかな……？）
次第に、アイリス色の瞳が催眠術にでもかかったかのように妖しく潤み始めた。
（はぁッ……入れたい……すっごく入れたいよ……ぉ……）
自分でも何をしているのかよく分からないまま、ぺたんとその場に尻餅をつくようにして座り込む。
（ちょっとだけだから……そしたら、ハァッ、このヘンな感じもきっと治るから……）
トイレでのオナニーの時と同じ言い訳を免罪符に、美月は折り曲げた脚を広げてスカートをたくし上げる。ショーツのクロッチ部分は既に濡れてベトベトだ。それを横にずらす

ようにして姫割れを曝け出す。
（私、こんなに、濡れちゃってる……やっぱり蘖の毒がまた溜まってるんだ……）
そろり、そろり、と指先が花弁を撫で、蜜の熱さを確かめる。
（ここに……ンッ、でもやっぱりこんな事……ダメだよ……食べ物で、お、オナニーするなんて……）
背徳感で少女の心臓は早鐘を打ち続けている。
（でも、シないと頭がおかしくなりそう……熱くて、アソコもおっぱいも苦しいよぉ……）
少女はまた、免罪符を握り締める。
（ちょっとだけ……ちょっと入れるだけだから、そしたらもうこんなコトしない……）
ちゅぷン……ッ。
「ン……あッ、はぁ……ッ」
吸い込まれるようにして赤い果実は蜜壺に埋まっていく。
（あは……ぁッ、私のアソコ、美味しそうに食べちゃってる……）
緑のヘタを残して、ミニトマトは完全に肉花弁の間に入ってしまった。ヘタを摘んで小刻みに出し入れする度に、ぴちゃぴちゃと蜜飛沫が腿の付け根を汚す。
「んあッ、は……ッ」
額にうっすらと汗を滲ませ、少女は秘密の快楽に意識を埋没させていく。
（この大きさって……ンッ、ちょうど男の人のアレと同じくらいなのかな……指もキモチ

良かったけど……んふぅッ……アソコの中でぴったり嵌まってる感じがッ、ンッ、クセになっちゃう……！）

果汁ではち切れそうな紅玉は、蜜を纏わり付かせ、すっかり少女の体温と欲情を吸って灼熱の輝きを帯びている。

（あッあッ、あぁ……ッ、このままッ、このままイっちゃう……ッ！）

次第に指の動きはリズミカルに、大胆になり、愛液の雫がフローリングにピッピッと飛び散るのも気が付かない。

（いけないのにッ、オマンコにミニトマト入れながらッ、私……ッ、イくぅぅ！）

「あぁンッ！　はぁ……ッ、はぁッ、ふぁぁンッ……!!」

今までは思った事すらない卑猥な言葉で自分を責め立てながら、魔法少女は台所の床で一人激しく果てた。

カーテンを閉め切った薄暗い部屋は雑誌や空き缶で足の踏み場もない。

ムワッとした青臭い空気が充満しているが、脳髄を直接刺激するようなその臭気の元は、ゴミ箱にうずたかく積まれている使用済みのティッシュだ。どれも黄ばんではいるがまだしっとりと湿り気を帯びている。

「ンはぁッ、ね……ねえちゃんッ！　はぁぁッ、出るッ！　出るよッ！」

（お姉ちゃんのこんな恥ずかしいところ、見ないで……！　聞かないで……！）
だがそんな時間が許されるはずもなく、乱暴に引き起こされ、仰向けにされる。
「よぉし、それじゃぁお待ちかねのチンポをご馳走してあげようかな……ほら、足を広げるんだ……ッ！」
「あ、あぁ……ッ⁉」
スカートを捲り上げられ股間を覆う布をずらされて、反射的に身体を縮めようとするが、
（あぁッ⁉　入れられちゃうッ⁉）
ジュブ……ッ！
「いッ、イヤぁッ……！」
熱くて硬い肉棒が一気に膣へと押し入ってくるのを感じて、美月は絶望の声を漏らす。
（どんどん奥まで……くぅッ、は、入って……ッ！）
あろう事か、既に蜜を湧かせていた蜜壺は、さほどの抵抗もせずに初めての牡肉の侵入を許していたのだった。
（そんな……ッ、こんな簡単に、私のアソコに……はぁッ、オチンチンが……）
反射的に押し返そうとして男の肩を掴む、が、腕にも脚にも力が全く入らない。そればかりか、ペニスを受け入れた膣全体が切なげにキュウキュウと収縮して更に奥へ、子宮口の手前まで誘おうとしていたのだった。
「ハァッ、何だ、トロトロじゃん？　実はずっとオチンポが欲しかったのかな……ッ⁉」

（そんなはずない……ッ、はぁッ、無理矢理なのにッ！　嫌なのに……ッ！）
男の言葉に追い打ちをかけられ、プライドまでが羞恥に染まって、少女は助けを求めるように視線を彷徨わせる。
（そんな……ッ⁉　本当にどうしちゃったの私の身体……⁉）
先端があと少しで処女膜まで来るのが分かる。だが、もう少女の肉穴は初めての凌辱に歓喜しかしていない。滾々と蜜を湧かせて純潔の証までをも捧げようとしている。
「ふぅッ、ハァッ……バージンのくせに美月たんのオマンコ、エロすぎぃ……ッ！」
鼻息を荒くした男は、美月の両脚を抱え上げ腰を更に深く突き込む。
「ふぁ……ンッ！」
より一層増した密着度に、また子宮が甘く疼いた。
完全に破瓜（はか）を待ち望んでいる牝の本能。それになんとかして逆らいたくても、始まった激しい抽送に理性が脳ごと揺さぶられる。
「あッ、あ……ッ、あッ、はぁン……ッ！」
ジュボ！　ジュブ！　ジュボボッ！　ジュブブブッ！
（ふぁッ、奥までッ、あッ⁉　は、入って……ッ⁉）
膣肉を掻き分けられる感触は、今まで何度も経験した自慰のそれとは違う。
「ひッ……いッ、イヤ……ッ、あ、あぁ……ッ、はぁ……ッ！」
肉棒が刺して抜かれるという単純なリズムに、美月の子宮も頭も、ゆさゆさと揺さぶら

れ、支配されていた。
ジュブブッ！　ジュブッ！　ジュブ！　ニュチュッ！
魔法少女の花園は、カウパー腺液とそれを遥かに上回る量の愛蜜で溢れ、泡立つ。
「ンぁッ！　ひ……ぐ……ッ⁉」
何かが当たる感触に、少女は身体をビクンと跳ね上げた。
（あ、私の……処女膜……⁉）
男も同じく気付いたらしい。
「おぉッ、これが……ッ、ハァッ、美月たんの……ッ、処女膜……ッ！」
部屋の男達がザワつく。
「アハッ、ホントにバージンだったんだね美月たん！」
（あぁ……ッ、私のッ、私のバージン……ッ！　破られちゃうッ！　こんな場所でッ、拓斗に見られて……ッ！　バージン破られちゃうッ！）
ズチュ……ッ！　ズブッ、ズブズブズブゥッ‼
ついに、少女の秘苑は扉をこじ開けられる。
「い……ッ⁉　いッ、ひぃッ……ひぐぅ⁉」
意識を覆っていたピンクの靄の中に、赤い稲妻が一閃した。
「ンハァッ！　魔法少女美月たんのロストバージンだぁ……ッ！」
「ひッ⁉　ンぁッ、あぁぁッ⁉」

肉が裂かれる痛みが、ペニスの膨張感と共に少女の口から悲鳴を上げさせる。
「ああッ、あぁ……ッ、はぁ……ッ！」
さっきは隠す事に成功した涙が、上気した頬を伝って後れ毛を濡らした。
だが、それも束の間、痛みはもう快感の中にどんどん溶けていく。
「ンはぁッ……ひゃンッ……！」
破瓜の衝撃が嘘のように、美月の膣肉は男の腰に合わせてうねり、締め付け、破瓜血の混じった牝蜜で物欲しげにペニスを扱き立てていた。
「あぁ……ン、ひゃう……ぅッ！」
男のために誂えたのかと思うほどにぴったりと肉棒に吸い付き、奥へ奥へと淫らに誘う。
（こんな……ッ、まるで、私が……ッ、キモチいいみたいじゃない……ッ！）
弟の命乞いの代償のはずなのに、まるで初めから求めていたかのように自分の口から嬌声が零れている。信じられない気持ちで美月は男の肩を掴んでいた。
（違う……ッ！　これはッ、拓斗の……ッ、拓斗のためなんだからッ！）
だが、男が腰を振る度に、グニャグニャと頭の芯が溶けていく。
（もう……ッ、はぁッ、アソコもッ、頭もッ……熱くて……溶けそう……ッ！）
「ふぁああッ⁉　あッ、あぁッ⁉」
抽送のリズムがふいに早くなり、膣の奥が乱暴にノックされる。
「あ、あぁ……ッ、乱暴にしないで……ッ！」

このままでは壊されてしまいそうだという恐怖に舌が震える。
しかし、男はその言葉で興奮をより高めたのか、今度はでたらめな強弱で蜜壺を蹂躙し始めた。
ジュップッ！　ジュグウウウッ！　ジュボッ！　ジュニュウウウウッ！
（こんなのダメ……ッ！　乱暴にされてるのにッ、腰ッ……動いちゃってる……ッ！）
膣肉をこれでもかと締め付けながら、少女の肉体は根元まで入り込んだ牡ペニスを、自分を受精させる対象と認識していた。
「うッ、美月たんマンコッ、急に締め付け……ッ⁉　も、もう出そうだよッ！」
男の声からはすっかり余裕が消えた。切羽詰まったその様子が、恐れていた瞬間がもう近いという事実を少女に突き付ける。
（やだ……ッ！　このままだと……しゃ……射精されちゃう……！）
「くぅぅッ、美月たんは、ハァッ、そ、そんなに俺のザーメン欲しいのかなッ⁉」
少女の肉穴の変化を男は都合よく解釈し、受精の懇願に応えるべく全身の体重をかけると、これでもかと肉杭を少女穴に突き込む体勢を取る。
「くッ！　そろそろ出そうだ……ッ！　溜めたザーメン思いっ切り注いじゃうよッ！」
「やッ⁉　ここで出さないでッ！　お願い……ッ‼」
牡にとってのセックスのゴールが何かという事を思い出して、少女は悲痛な声で懇願する。保健体育の教科書のイラストが脳裏に大写しになっていた。

「赤ちゃんできちゃう！　赤ちゃんッ、あッ……はぅぅぅッん⁉」
嫌がる声とは裏腹に、牝肉は淫らにペニスにむしゃぶりつき、そして――。
「んぁ⁉　んぁぁぁッ！　だめッ、中に出しちゃダメぇぇぇ……ッ！」
腰をズンッと深く打ち付けられ、少女は本能的に受精の瞬間を悟って絶叫する。
ぶびゅッ！　びゅるびゅるびゅるッ！　びゅるッ！　びゅくびゅくびゅくッ‼
膣内で跳ね上がった肉棒から、熱い牡汁が子宮目がけて一気に噴射された。
「いやぁッ⁉　なにこれ熱いッ！　熱いのいっぱい入ってッ……んぁあああッ⁉」
びゅッ！　ぶびゅ！　びゅるびゅる……ッ！　ぶびゅッ！　ぶびゅびゅッ！
欲望の限りを吐き尽くすために限界まで膨れたカリ肉と、精子を待ち望んで収縮する膣肉が、これ以上はないというまでに一体化し、少女の無垢な領域は名前も知らない男のスペルマでねっとりと白く染められていく。
（はぁッ、どうしよう……こんなにお腹に出されたら……絶対赤ちゃんできちゃう……！）
膣襞に夥しい量の精液を感じながら、紫髪の魔法少女は絶望と共に身体を震わせるが、同時に、子宮口目がけて押し寄せる白濁の力強さにマゾヒステックな性感を感じてもいた。
（酷い……こんな力尽くで、拓斗の目の前で……私のバージン、奪われちゃったんだ……）
撃ち込まれた白濁汁の熱さは、汚されてしまったという強烈な実感を少女に強いる。
「ふぁぁ……ッ……すげぇ……美月たんのエロマンコ、最高だよ……」
Tシャツの男の呆けたような声が聞こえるが、美月もまた放心し切っていた。

「今のバッチリ撮れたよ……魔法少女美月たん、おねだりレイプで処女喪失、ってタイトルで動画サイトデビューしちゃう？　嬉しい？」
スカートは捲れ上がり、胸元はリボンを解かれて谷間を露わにされたしどけない格好を、男達は熱心に撮影している。
（そんなの嬉しい訳ないじゃない……絶対にやめて……！）
抗議したくても、口から出るのは「ふぁ……ッ……ひぅ……」という情けない喘ぎだけだ。きっちりと結わえてあったツインテールはシーツの上で乱れ、力なく投げ出された両手には男の汗の感触がまだ残っている。無様に広げられたままの両脚を閉じる気力すら失って、カメラから顔を背けるのが精一杯だった。
「んじゃ、美月たんはレイプ大好きッ子みたいだから、次も遠慮なく濃いザーメンたっぷり注いであげるねぇ」
今度はスーツの男が服を脱ぎ捨てながら、いそいそと美月の脚の間に押し入って、ペニスを宛がってくる。
「うわぁ、やっぱ美月たんは可愛いなぁ……こんな可愛い魔法少女がいたら、孕ませてあげないと男が廃るよねぇ？　あッ、どうせなら僕のザー汁でお願いね？」
「そんな、どっちもイヤ……あぁ……ッ⁉」
腰を掴まれ、ペニスを深々と突き立てられて、魔法少女は使い回される。
にゅちゅッ！　じゅちゅ……ッ！

受精の熱ですっかり蕩けた肉穴は、卑猥な音を立てながら次に自分を受精させる相手を迎え入れてしまっていた。
（くはぁッ、オチンチンの先が広がって……アソコの中、ゴリゴリされてるッ！）
破られたばかりの処女膜もその残骸を肉棒に絡ませ、健気に奉仕を始める。身体の全ての部分が美月の意志を裏切って牝の悦びに悶えている。
「ハァッ……悪いけど、さっきのザーメンは出しちゃうからねッ！　全部掻き出してあげるッ！　僕のザー汁で可愛いお腹をパンパンにしてあげる……ッ！」
熱に浮かされたように喋りながら、スーツの男は膣襞を擦り上げるようにして高速で肉棒を出し入れし始めた。
「ンッ、んひいぃ……⁉」
じゅぽ！　じゅぶッ！　じゅぶぶッ！　じゅちゅッ！　じゅちゅちゅ……ッ！
子宮へと流れていく先客の精液を、凶暴なまでのピストンが遮り、掻き出す。
（あぁ……ッ、アソコの中で精子が掻き混ぜられて……外に出されてる⁉）
子宮口にへばり付いた精子塊が、ゴリッとした感触と共に剥ぎ取られて新しい男のペニスで膣外まで引き摺り出される。
「ふぁぁッ、イイよ！　イイよッ！　美月たんのオマンコ、めっちゃ吸い付いてくるぅ！」
（そんなつもりじゃない……ッ！　勝手なッ、はぁッ、事……ッ、言わないでッ！）
少女と男の性器の間で、精液の泡は次第に量を増していく。ほんのりと桜色に染まった

泡は少女の破瓜の証だが、己の精子を受精させるのに夢中な男にとっては、もはや単なる他の牡の残滓に過ぎない。
ぐじゅぷッ！　じゅぷ！　ぐじゅじゅッ！　ぐちゅぶちゅッ！
純潔を奪われたばかりの花園は、今やもう凌辱の悦びに喜悦の蜜を垂らし続け、ただの生オナホールとなってレイプされるがままとなっていた。
「ほらほらッ、まんぐり返しッ！　好きッ⁉　美月たんはまんぐり返し好きッ⁉」
あらかた掻き出したのか、今度は自分の精液を注ぐべく子宮口を直撃する体位に変えてレイプは続けられる。
「ふぁぁッ！　あひッ……んあ……ッ！　んひぃッ！　あぁぁぁぁンッ……！」
抽送の度に美月は凌辱者の腕の中でがくがくと揺すぶられる。膣奥で激しいピストンを受け止め嬌声を張り上げる事しかできない肉人形に成り下がった魔法少女の頬に、掻き出された精液の飛沫が飛ぶ。
じゅぷッ！　ずちゅッ！　ずちゅちゅッ！　ジュポッツ！　ヌポッ！
（このままじゃッ、イかされちゃう！　それだけはッ……拓斗が見てるのにッ！）
快楽で呆けた思考の片隅で考えられるのは弟の事だけだ。それも次の瞬間には肉棒の執拗な突き込みに霧散してしまいそうになる。
（イくのだけは……ッ、せめて、イくのだけは我慢……ッ、しなきゃ！）
「ん……ッ、んひぃいいいッ！」

パチュン！　パチュン！　と肉交の音が鳴り響く蒸し暑い部屋の中で、少女の身体も、男の身体も、汗と淫汁でぬめっている。

「ハァッ、美月たんッ、コスチュームがッ、ふひッ、汗でスケスケだよッ！　そんなに僕のチンポ好きになってくれたのかなッ⁉」

折り畳まれるような身体の中心に肉棒を突き込まれながら、美月はせめてもの抵抗として弱々しく首を振り続ける。

「ち、違う……はぁッ、そんなんじゃ……あひッ！　あひぃぃぃンンッ⁉」

狂ったように腰を打ち付け始めた男の下で、美月は悲鳴のような喘ぎを上げた。

「アハハハッ！　魔法少女は乱暴にされるのが好きなんだねッ！」

「ち、ちが……！　あぐぅぅッ⁉　はッ、はひぃ⁉」

悲鳴と一緒に涎が口の端を伝っているが、そんなものに気付く余裕などあるはずもなく、拒絶の仕草をしながらもすっかり濡れ切った牝の表情で、少女は絶頂が近いのを感じ取る。

（こんなのでイかされるなんてッ、い、イヤ……ッ！　ダメッ！）

「ふぁぁぁッ！　ひぃッ！　ひぃぃ！　んあッ、んあああああぁぁ！」

だが、喘ぎも既に甘いが激しい獣じみたものに変わっていた。

「イくのッ⁉　ねえッ、もうイっちゃうのッ⁉」

返答は膣肉が勝手にする。ぎゅうぎゅうと肉棒を締め付け、このままイかせて欲しいと懇願する。おねだりする。

「イくんだねッ⁉　アハハッ、美月たんマンコッ、イっちゃうんだねッ⁉」
ジュプッ！　ズッ！　ズズズッ！　ジュッポォッ！　ニュプププッ！　ズグッ！
鈴口から溢れる粘液の量が一気に増して、破廉恥な水音が高らかに鳴り響いた。
グジュゥッ！　ジュプッ！　ジュググッ！　グニュンッ！
「ひぁ……ッ、ひゃぅぅンッ！」
さっきまでなら拒んだはずの命令にも、嬌声で応えて。
（イきたくない……ッ！　でも、もうッ、キモチよすぎて頭がおかしくなるッ！）
淫乱魔法少女はもうこの快楽地獄から抜け出す事しか頭にない。
（もっ、もうダメッ！　イくッ！）
夢中になって男の背中に脚を絡める。一緒になって腰を振る。清楚な花のようだった紫衣はベッチョリと濡れそぼり、ただの布切れと化している。
「はぁッ、ダメぇぇ！　あ、熱いのッ！　熱くて大っきいの奥に当たってるのぉぉッ！」
紅潮した頬に浮かぶのは、娼婦の媚（こび）と牝の悦びしかなく、唇からは下品な涎の糸を幾筋も垂らしてよがり泣く。
「あひッ！　いッ、イくぅッ！　イくッ！　美月イきますッ！　イくぅぅぅぅぅッ⁉」
耳を塞ぎたくなるような甘い嬌声を長々と上げながら、紫髪の魔法少女は生まれて初めての肉棒絶頂に悦涙を流した。
「イけよッ！　魔法少女のくせにチンポ狂いになってる顔も全部撮ってもらえよッ！」

「……す、凄い……」
ごくりと唾を飲んで、少年は見事な肉感の白い脂肪球に吸い寄せられる。バレーボールの球ほどもある重たげに張り詰めた乳房。
（美味しそうなオッパイ……）
乳輪は大きめだが、色は扇情的なバラ色で、硬く立った乳首からは、ポタポタと緩んだ蛇口のように乳白色の液体が落ちて乳房の下半分を濡らしている。よく見ればサマードレスも胸元は母乳を吸って甘い匂いを放っていた。
『ほら、飲んでいいのよ』
そう言いながら女は少年の手を自らの乳房に当てさせる。
『あ……んッ！』
「ご、ごめんなさい！」
両方の乳首から、白い液体が、ピュッ！　と勢いよく噴き出したのを見て、反射的に謝ってしまった少年だが、同時に腰の奥が熱くなるのを感じていた。
ドクン、ドクン……ドクン……！
『いいのよ、ほら、こんなに出て苦しいの』
おもむろに自分の乳房を掴み、揉みしだく。途端に、驚くほどに大量の母乳が乳首から筋を描きながら四方に飛び、少年の頬や髪に小さな雫を幾つも撒き散らした。
『ほら、ハァッ、飲んで……』

乳房を揉む度、母乳は脈動するかのように噴き出し、少年の幼茎を更に硬くさせる。
『ん……くふン……！』
時折気持ち良さげに鼻を鳴らし、うっとりと目を細めて身体をくねらせている。
（あったかい……）
女の太腿を自分のペニスがぐいぐいと押し始めているのが分かって、余計に頭に血が上る。女の乳首からはまだ母乳が白い筋となって流れている。
陰茎をひくつかせながら、少年はその白い流れに向かって舌を突き出した。
ぺちょ……ッ……。
「……美味しい……」
もう一舐めしたくなって、大胆に舐め取る。
「甘い……」
我慢できなくなって、乳首に直に吸い付き、チュウチュウと音が立つのも構わず貪り飲み始めた。唇の間でプルプルと細かく震えている乳首を舌で引き寄せ、引っ張るようにして母乳の噴射を促す。
（もっと……もっと飲みたいッ！　お腹いっぱい飲みたい……！）
こくこくこく……と、少年は喉を鳴らしながら無我夢中で乳首に吸い付く。それだけでは満たされなくて、もう片方の乳房を捏ね回し、迸る母乳を顔に、首筋に受け止める。
「ふぁ……オッパイ、あったかい……ッ！」

うっとりとしながら二つの乳房の間に顔を埋めては、溢れる母乳を浴びて、少年の思考は次第に白く染まっていく。
（あはぁ……美味しいッ、美味しいよぉッ！）
じんわりじんわりと、温い湯に浸かっているかのような温もりは、いつの間にか疼きに姿を変え始める。飲めば飲むほどに身体は熱くなり、咽喉が渇く。
そして、狂おしいまでに滾った陰茎がジャージの股間を膨らませる頃には、瞳は虚ろになっていた。
「んく……ッ、ぷは……ぁ……ッ、んくッ、んくんく……ッ……！」
（はぁ……はぁ……ッ、お腹が……重たい……）
もはや飲み下す事すら忘れて、口中の母乳をダラダラと唇の端から垂らしている。
（どうしてだろう……お腹の中が……燃えてるみたいに……熱い……）
夢中で飲んでいた時には気付かなかった食道と胃の違和感に、動きが止まる。
「んあッ……はう……ッ!?　ハァッ……ハァァ……ッ!?」
あれほど執拗だった渇きはもう収まっている。その代わりに少年の意識を支配し始めているのは、甘く切ない痺れだった。
『……あらぁ、どうしたの、坊や？』
半ば停止した思考で、少年は原因を探す。
（お腹の中がッ、チリチリして……く、苦しい……ッ！）

甘く芳しかったはずの母乳は、恐ろしい毒となって少年の身体を中から蝕みつつあった。
「んッ、く……ぅぅッ！」
こめかみに脂汗が浮ぶ。芋虫のように身体を丸め、少しでも冷やそうと地面に身体を擦り付け、転げ回る。
「くッ、うぁぁ……!?」
（頭が……！　背中が……ッ、ムズムズするッ!?）
少年の身体の中で、異変が始まっていた。
振り乱した髪がザッとくねる。
小さな蛇の群れのように暴れ、白い背中で波打つ。
その背中が、ゆっくりと色を変え始める。
白から黒へ。
色だけではない。質感も変化する。
つるりとした皮膚からゴワゴワと硬い毛が生え、背中から肩へ、肩から指の先へと広がっていくのを感じながら、驚きで息がうまくできない。
「うぉ……、うぉぉン!?」
（どうして……!?　ボクの身体、形が変わっていく!?）
立っていられずに地面にべたりと突いた手を見て、少年は絶叫する。
「うぉぉぉンッ!?　おぉぉぉ……ンッ!!」

その手は、見慣れた自分の手ではなかった。
真っ黒な毛に覆われた、犬の前足だった。
「おぉぉぉぉン！　おぉぉンッ！」
どんなに叫んでも、荒々しい遠吠えにしかならない。
「おぉン……おぉぉン……ッ、おンッ、おンおン……キュウゥン……」
どれだけの時間が過ぎたのだろうか。
少年、いやかつて少年だった黒い生き物は、呆然と項垂れていた。
（そ……そんな……ボク、犬になっちゃったの……!?）

「どうして……？　どうしてこんな事に……!?」
お座りをした黒い犬の前で、美月は何度も何度も繰り返す。
「拓斗……ッ、ねぇッ、一体何があったのよ……ッ!?」
「クン……ッ、クゥン……」
拓斗が水を探しに行った後、しばらくして現れた大きな黒い犬を目にした時、美月はそれが弟だとは分からなかったが、頭の中に響いてきたのは紛れもない弟の声だった。
『ごめん姉ちゃん……ボク、犬になっちゃった……』
悲しそうな瞳の奥に弟の面影を感じて、美月はおずおずと犬の首に手を回していた。
「拓斗……苦しいの……？　大丈夫？」

「きゅぅぅ……ン」
掌で顔を包んでやると、弟の思考が堰を切ったかのように流れ込んでくる。
『ボク、知らない女の人のおっぱいを飲ませてもらったんだ……そしたら、こんな風になっちゃって……この森は怖いよ……早く出ようよ……』
駄々っ子のような、だが不安に震える声が、美月には確かに聞こえていた。
「拓斗……ごめんね……」
後悔という名の毒が、全身をじわりじわりと蝕んでいく。だがその毒は、どこか甘美で、淫らな匂いがした。
「お姉ちゃんが守ってあげないといけなかったのに……ごめんね……」
首を抱いて顔に頬を擦り付けると、力強い鼓動が伝わってくる。
『違うんだ……たぶん、これはボクが悪い子だから……ボク自身が悪い心を持っていたから、犬になっちゃったんだよ……』
「そんな事ないよ……拓斗は、悪い子なんかじゃない……絶対に違う……！」
美月はそう答えるしかない。だが、黒い犬は嬉しげに姉の頬を舐めて言葉を続ける。
『ボクね……姉ちゃんをボクだけのモノにできるなら、どうなってもいいって思ってたから……だから、姉ちゃん……最後に一度だけお願い……ボク、姉ちゃんのアソコに……キス、したいな……』

（この子を……こんな姿にしてしまったのは、私のせい……）

美月は、心を決める。

こんな事をして、何が解決する訳でもない。しかし、弟をこんな姿にしてしまった自分に何かを科さねばならないという思いが胸中を支配していた。

「……舐めていいよ……でも、優しくしてね……」

咽喉が詰まって、声が出ない。息ができない。

『ホントに!?　あぁ……姉ちゃん……姉ちゃん……ッ、大好きッ！』

「……うん、私も拓斗の事、大好きだよ」

弟犬を刺激しないよう、そろそろとクロッチ部分をずらし、姫割れを二本の指で開く。

「優しく、ね？」

『いいの……!?　ホントにいいの!?』

助けを求めるかのように潤んでいた幼い瞳が、鋭い光を湛えたそれに変わって、剥き出しの性器に生暖かい獣息を感じるのと、舌が肉花弁に触れたのはほとんど同時だった。

無意識の抵抗も、舐められているうちに溶けていく。

心置きなく姉の秘所を味わう事のできるようになった弟犬の尻尾はせわしなく動き、全身で悦びを表していた。

（拓斗の舌……拓斗の舌で私のオマンコ舐められてるんだ……）

もう美月は脚を閉じようとはせず、それどころかいつの間にか腰を突き出していた。
（でも、犬の舌なんだ……はぁッ、ザラザラして、人間と全然違う……ッ！）
「はぁッ、あぁ……拓斗……ぉ……」
姉の切なげな喘ぎにも、弟犬は牝蜜を舐め取るのに夢中だ。
『あぁ……そうだッ、コレが……んじゅッ、姉ちゃんの味だよッ！　甘酸っぱくて……ハァッ、ちょっと……しょっぱくて……』
卑猥な言葉を口にしながら、弟犬はクンニリングスの激しさを増していく。
『姉ちゃんのマン汁、美味しいよ……毎日オナニーした後で、ボクにわざと食べさせてたんだよね……ミニトマトとか、キュウリとか……ボク、姉ちゃんの味覚えちゃったんだよ……姉ちゃんのせいだ……姉ちゃんが、ボクにいけない味を覚えさせたんだよッ、責任取ってくれよ……ッ！』
「そんな事言わないで……ッ、私ッ、拓斗が見てるなんて知らなかったんだから……ッ、はぁッ、ただ……拓斗に、食べて欲しくて……私……だから……」
言い訳は、並べるうちに欲望の告白に変わっていく。
『姉ちゃんがこんなにいやらしかったなんて、すごく嬉しいよ！　もっと、もっと姉ちゃんとしたいっ！』
腰を引こうとしても、弟犬の舌の動きは更に激しくなり、溢れ出る愛蜜を残さず啜ろうと、丸めた舌先を姫割れの奥まで突き入れてくる。

「あッ、あぁッ、ハァ……んッ！　中にはッ、あッ、入れたらダメッ！」
『どうして？　姉ちゃんのココ……ハァッ、びしょびしょだよ？』
その言葉通り、少女の蜜壺は犬舌を歓喜と共に迎え入れていた。
「あぁ……ッ、そんな事言わないでぇ！」
弟にまで蔑まれてしまうという恐怖で首を振るが、ブジュブジュッ、と噴かせてしまった蜜の熱さに被虐心が加速する。
「あぁンッ、もうッ……やめてッ、そんなに舐められたらッ、お姉ちゃんおかしくなりそう……ッ！」
懇願すればするほど自分の惨めさを曝け出す。そしてその分、官能の炎が理性を炙る。
（こんな惨めな格好でッ、あぁッ、私、拓斗の事助けてあげなきゃいけないのに……お姉ちゃんなのに、感じさせられてるッ！）
『姉ちゃんッ、ハァッ、ハァッ……凄いエッチだよッ！　これ、見てよ……』
「ひッ⁉」
弟犬の股間にそそり立つ赤い獣茎を見て、少女は目を見開く。
（これ……拓斗の……オチンチン……⁉　こんなに大きくなるものなの⁉）
見た目は人のペニスと似たような姿だが、違うのは、人間のペニスだと亀頭となる部分のその先に竿のように伸びた部分が付いている点だ。肉棒の途中に大きな亀頭があると表現すればその異質さが分かるかもしれない。

『ハァッ、姉ちゃん……ボクのこれも……ハァッ、舐めて……』
そんな異形の性器を勃起させて苦しげに喘ぐ様子は、美月の胸を締め付けた。
（そうだよね、私もあんなに苦しくて……毎日オナニーしてたんだから……拓斗のも、苦しいよね……？）
「いいよ……お姉ちゃんの顔に跨って……」
そのまま地面に横たわり、弟犬の腰を抱え込むようにしてペニスの下に口を宛がう。
赤い肉棒の先からは、もう透明な液体が盛り上がり、ツゥーッと糸を引き始めていた。
『あぁ……姉ちゃんッ、早く……ぅ……オチンチン爆発しそうだよぉ』
粘液からは、確かに青臭い、生殖本能を煽る匂いが立ち昇ってくる。
（ふぁ……ッ、エッチなニオイ……形は違うけど、犬のオチンチンって、人間のオチンチンと変わらないんだ……）
妙な愛おしさが込み上げて、垂れ落ちてきた牡汁を舌で受け止めた。
（んんッ……しょっぱい……）
獣幹の根元に手を添えると美月は大きく口を開ける。身体も心もさっそく奉仕モードのスイッチが入っていた。
「あむ……ッ……ん」
咽喉（のど）の入口にまで届く長大さに、ゾクゾクと身体が震える。
（んんッ、ふむぅン……ッ、拓斗のワンコちんぽッ、太いッ！）

シックスナインの体勢で、美月は犬肉棒にしゃぶりついた。
「んじゅ……ッ！　じゅるッ！　ジュルル……じゅぶッ！」
頬肉の裏側で肉傘がゴリッゴリッと当たる度に、上気した頬がボコッと膨らむが、少女は弟犬のペニスに一心不乱な口腔奉仕を続ける。
『んひッ、姉ちゃんの口の中……ッ、めちゃくちゃ気持ちイイよッ！』
弟犬の声が上擦っている。初体験にしてはあまりにも異常で激烈な快感は、童貞の少年にとっては媚薬を脳に直接注がれているのに等しいのだから。
『あぁーッ、姉ちゃんッ！　姉ちゃん……ッ！　これヤバいよ！』
尿道から勢いよく出続ける粘液に、弟犬は我を忘れてハッハッハッハッと息を荒らげる。重たげに垂れた睾丸を姉の口元に押し付けると、
「んふぅぅンッ！　むぐ……ッ！」
美月は苦しげな声を出しながらも肉幹を吸う速度を速める。
『姉ちゃんッ、そのままお口で受け止めてッ！　姉ちゃんの顔……汚させてッ！』
「むぐぅ……ンッ、はふぅ……ふぁッ、んむむぅぅ……⁉」
一人と一匹の動きが、ゆるゆると止まったかと思うと、
ピュッ！　ピュッ、ピュッピュッ、ピューッ！
美月の口の中で、ペニスが伸縮を繰り返した。
（え、何ッ⁉　これ、もう出ちゃうの⁉）

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

あなたのキモチイイをお手伝い!
キルタイムのアダルトコミック誌!
業界唯一!エロラノベ&エロコミック満載!!
成年向け雑誌
二次元ドリームマガジン
2D DREAM MAGAZINE
対鬼忍アサギ3
姫騎士教育係外伝
今号の特集
責めアナル
KTC特製
スポーツタオル発売決定!
偶数月
17日発売
魔法、催眠、性転換…不思議Hコミック誌!
04 2013 April
price 680yen
絶好調不思議Hコミック誌!
増ページ
特大号!
奇数月
12日発売
KTCといえば闘うヒロインアンソロ!
二次元ドリームコミックス
メガミクライシス
MEGAMI CRISIS
Vol.III
成年向け
高浜氏郎
奇数月
下旬発売
忍アサギ3
Anime Lilith
コミック UNREAL アンリアル
メガミクライシス
MEGAMI CRISIS
詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて!
キルタイム
検索
Click
電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!
※いずれも18歳未満の方は購入できません。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

http://www.comic-valkyrie.com/

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

http://www.cran-berry.com/

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

http://www.mille-feuille.jp/

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

http://www.2d-dream.jp/

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!